様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　5 月　31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520240
研究課題名（和文）　三大社会病（結核、梅毒、アルコール中毒）と自然主義期の小説
研究課題名（英文）　Three great social diseases (tuberculosis, syphilis, and alcoholism) and novels in the age of naturalism

研究代表者
寺田　光徳（TERADA　MITSUNORI）
熊本大学・文学部・教授
研究者番号：10155468

研究成果の概要（和文）：
平成１９年度はアルコール中毒についてゴンクール兄弟の『ジェルミニー・ラセルトゥー』（１８６５）およびゾラの『居酒屋』（１８７７）を研究し、後者を論じた論文を執筆した。平成２０年度の研究主題に取り上げた結核については、１９世紀後半の１８８２年にコッホによる結核菌の発見という病理学上の重大な転機があったので、結核病因論の確立の前後を比較することは研究上不可欠なことであった。そこで１９世紀前半のバルザックやデュマ・フィスなどの小説からはじめて、結核菌発見の前後の時期を覆うゾラの「ルーゴン＝マッカール叢書」を詳しく検討した。そして１９世紀前半の文学作品中の結核に関する研究論文を執筆・公表した。最終年度の平成２１年度は１９世紀後半の文学作品に関する結核について研究論文を執筆するとともに、「ルーゴン＝マッカール叢書」の梅毒についても研究をした。また２１年度末には３年間の研究成果を報告論文の形でまとめて発表した。

研究成果の概要（英文）：
The reporter researched about alcoholism on *Germinie Lacerteux* (1865) of the Goncourt brothers and *Assommoir* (1877) of Zola in 2007, about tuberculosis from the first half of the 19th century Balzac, Dumas-Fils and others' novels to Zola's series of Rougon-Macquart(1870-1893) in 2008, about the syphilis similarly on Zola's same series of novels in the final year of fiscal 2009. For each three-year research he published the papers as results.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：結核、梅毒、アルコール中毒、自然主義文学、ゾラ

１．研究開始当初の背景

１９世紀後半の欧米では細菌学の誕生によって近代医学の基礎が確立された。その当時フランス社会を揺るがしていたのは三大社会病と称された結核、梅毒、アルコール中毒であった。ところで自然主義期の小説は何よりも社会を写実的に写し取ることを主眼としている。近代社会のめまぐるしく変貌する模様を書き留めた自然主義期の小説に、これらの社会病がどのような影響を与えていたのかは当然文学研究の視野に入ってきていいはずであろう。しかし結核などの医学に関する研究は医学史としてこれまで医学者の専門と見なされてきたせいか、文学研究者の取り扱うところとはなっていなかった。

ところで文学研究と同じような状況におかれていた、文学研究に隣接する歴史学においては最近状況に大きな変化があった。歴史学研究の主要な対象として医療の分野が取り上げられ、そこからめざましい研究成果があがってくるようになったのである。

そこで本研究においては、自然主義期の小説の中で同時代の三大社会病がどのように描かれているのか、歴史学の最近の成果に依拠するとともに、歴史学的、社会学的な観点を取り入れて、文学研究の地平を拡大し、新たな成果を上げることを目論んだ。

２．研究の目的

同時代の社会を写実的に小説に描写しようとした自然主義作家たちの中で、周知のようにゾラはとりわけ第二帝政時代のフランス社会を遺伝学を中心とする医学的知識に基づいて再構成しようとした。したがってめまぐるしい医学研究の発展もまた彼の虚構世界に大きな影響を与えている。ゾラの代表的な文学作品である２０巻の小説からなる「ルーゴン＝マッカール叢書」について結核、梅毒、アルコール中毒がどのように取り入れられ、小説作品の中でそれらの病気が特に説話論的にどのような役割を担っているかを分析することが本研究の最も重要な目的である。

しかし他方で細菌学を中心とする近代医学はドイツのコッホやフランスのパストゥールを中心に１９世紀後半にめざましい進歩を遂げ、近代医学に革命的転換を遂げさせた。フランスの近代社会を描くにあたって写実主義を標榜する代表的な小説家にバルザックやゾラがいるが、前者は１９世紀前半のもちろん結核菌が発見される遙か以前の時代の作家で、後者は長い作家生活の半ばに結核菌発見という医学史の一大事件に遭遇することになった。このような医学研究のめまぐるしい変転が、複雑な形で、文学作品に影響を与えていることは言を俟たない。同じ写実主義を標榜していてもバルザックとゾラの作中における結核が異なっているのは言うまでもないのだが、同じゾラの叢書中でも作品により結核菌発見の前と後では結核観が相違してくることは、ゾラが同時代の医療に深い関心を払っていただけに当然想定されてくることである。

したがってとりわけ結核に関しては、１９世紀前半のバルザックも結核に関する対照的研究対象に含めなければ、ゾラないし彼と同時代の自然主義期の作家たちの作品の特徴は浮き彫りにされてこない。

本研究では三大社会病の１９世紀における医学史の研究状況を追いながら、同時代の作家たちがどこまで医学研究の進展ぶりに影響された作品を書いていたのか、あるいはむしろ作家自らそれを積極的に小説の説話に活用しようとしたのかを検討した。そして結核のように病理学の進展に大きな変化があった場合には、１９世紀を通して、歴史的な観点を視野に取り入れ、同時代の病理学を対照させながら、文学作品における病気の研究を試みた。

３．研究の方法

(1) 三大社会病（結核、梅毒、アルコール中毒）を作中でテーマとしてあるいは言及するなどして取り上げた作品を、よく知られたゾラやゴンクール兄弟に限らず、必要な場合には広く１９世紀に全般にわたって調査し、その描かれ方を研究した。

ところで結核に関しては、１９世紀の病理学の変転が、コッホの結核菌発見から判断されるように、めざましいものであったことが理解される。したがって文学作品における結核については１９世紀の前半のバルザックから、「美人薄命」の典型例を世に供した、ロマン主義的結核観を披瀝するデュマ・フィスの『椿姫』、そしてロマン主義的結核観とは大きく質を異にするゾラの「ルーゴン＝マッカール叢書」の結核を詳細に分析した。

アルコール中毒については、それを中心的テーマにしようとする文学作品はゾラの「ルーゴン＝マッカール叢書」の『居酒屋』しか存在しないであろう。この作品ではアルコー

ル中毒患者となる作中の登場人物は遺伝的にアルコール中毒に規制されている側面もあるが、小説の舞台となったパリの場末に対する社会学的考察もアルコール中毒蔓延の原因として欠かせない。したがってこのテーマについては、遺伝学的観点と社会・歴史的観点を大幅に取り入れて研究を試みた。

（２）文学研究とは言いながら、三大社会病をテーマとする限り、同時代の医学研究の状況を参照することは必須の条件である。上記三大社会病に関する同時代の病理学がどのような内容であったのか、当時の医学事典（１９世紀前半のパンクーク６０巻やドシャンブルの１００巻など)、遺伝学に関する医学文献（プロスペール・リュカ、モレル、モロー・ド・トゥールの遺伝学；マニャンのアルコール中毒学など)、並びに当時の詳細な百科辞典（１９世紀ラルース大辞典など）を検討して、現代との相違や、時期ごとの変化の模様に着目した。さらに文学研究の中でも当時の医学に注目する文献をとりわけ研究の参考として重要視した。

（３）とりわけ自然主義期の小説は、その虚構世界を完結した作品として成立せしめている説話の論理と医学という科学の論理のせめぎ合いとして現出しているので、作家別、作品別、また結核、梅毒、アルコール中毒という病気の種類別に、両者の論理の拮抗関係に関する詳細な分析を行った。

４．研究成果

（１） 結核研究

結核については、１９世紀前半のバルザック『あら皮』を最初の研究対象とした。この作品では主人公ラフェルの寿命を可視化する不思議なあら皮が神秘主義的デコイとして注目を集める。しかしラファエルの早すぎる死を読者に合理的に説得しているのは作品の説話の論理として科学的に展開される結核の病理学である。

デュマ・フィス『椿姫』では結核と恋愛の情熱が緊密に結ばれて紹介され、またそれが「美人薄命」というロマン主義的結核観の遠因となっているが、それらは同時代の医学理論にも説かれているので、文学の占有的な考え方ではない。医学の方が小説に先んじてロマン主義的な考え方をとっていたといえる。

ゾラの「ルーゴン＝マッカール叢書」に対する研究では、同時代の病理学と説話論との関わりを詳細に検討した。この叢書の結核患者はムーレ家のみに生じているので、ゾラの描いた結核は明らかに説話論的意図を持ったものである。結局叢書の中で結核というのはルーゴン＝マッカール家の始祖アデライド・フークの不吉な遺伝を絶やすための淘汰の原理として機能している。またゾラの結核観は明らかに当時の生理学に依拠した自然主義的観点を採用しており、その点ではロマン主義的結核観と対立するものである。

このほか、１９世紀のフランス文学における結核を主題にした作品として、ミュルジェールの『ボヘミアンの生活情景』、アブ―の『ジェルメーヌ』、ゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』についても、それぞれ結核関する考え方の特徴と病気と説話の論理との関係の仕方を分析・提示した。

（２）アルコール中毒研究

この病気に関してはゾラの『居酒屋』のみを分析対象とした。この作品の一方の主人公はジェルヴェーズであり、彼女は遺伝的にマッカール家の始祖アデライド・フークに結ばれて、その大きな影響を受けている。つまり彼女がアルコール中毒に陥るのは遺伝的に必然であるように感じられる。しかしながら他方の主人公であるジェルヴェーズの夫となったクーポーは、遺伝的であるよりもむしろ彼のような労働者が暮らしていた生活環境・労働環境の方に大きく影響されて、アルコール中毒に陥り、最後はアルコール中毒死という悲惨な最期を遂げている。『居酒屋』のアルコール中毒はその点から考えると、ゾラが社会的側面を重視しようとした小説となっている。

しかし先のジェルヴェーズのアルコール中毒に遺伝の働きがあったことと同様に、彼女の子供たちも皆それぞれ現れ方に多少の差異はあるものの、遺伝の悪影響を受けて子孫を残すことなく生涯を終えていった。つまり、先の結核と同じく、ジェルヴェーズのアルコール中毒は始祖のアデライド・フークの患う神経症の変性症として、マッカール家の不吉な遺伝を抱えるものたちの淘汰の原理として機能しているのである。

（３）梅毒研究

これについては、すでに報告者は『梅毒の文学史』(１９９９)という著作を公刊しているので、それに対する補完研究としてゾラの「叢書」の梅毒記述の特徴を明らかにした。

（４）以上の結核、アルコール中毒、梅毒に関する三大社会病の研究成果としてとりわけ強調しておきたいのは、

①結核について見ると、病理学研究の進展に影響されて、文学作品の結核叙述には変化があり、また作家によっても小説の説話に対する利用の仕方が異なっていることが明らかであること。

②特にゾラの「ルーゴン＝マッカール叢書」

では、結核がムーレ家の、アルコール中毒がマッカール家の淘汰の原理として機能しているという、ゾラの説話の論理としての自然主義的な病気の考え方が明らかにできたことである。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計５件）

① 寺田光徳、「ルーゴン＝マッカール叢書」の肺癆、文学部論叢、査読有、１０１号、２０１０、pp.７５－１０２.
② 寺田光徳、アブーの『ジェルメーヌ』とゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』の肺癆、社会文化研究、査読有、８号、２０１０、pp.１１－２２.
③ 寺田光徳、バルザックとロマン主義作家たち（デュマ・フィス、ミュルジェール）の肺癆、文学部論叢、査読有、１００号、２００９，pp.８１－１０４.
④ 寺田光徳、ルーゴン＝マッカール叢書のアルコール中毒（後編）、文学部論叢、査読有、９８号、２００８、pp.３５－６７.
⑤ 寺田光徳、ルーゴン＝マッカール叢書のアルコール中毒（前編）、社会文化研究、査読有、６号、 ２００８、pp.１３－４０.

〔学会発表〕（計１件）
①寺田光徳、「ルーゴン＝マッカール叢書」の結核、自然主義文学研究会、２０１０年５月２８日、慶應義塾大学（三田）

〔図書〕（計１件）
①寺田光徳、『三大社会病（結核、アルコール中毒、梅毒）と自然主義期の小説、平成１９～２１年度科学研究補助金研究成果報告論考』、２０１０，１３７ p.

〔その他〕
ホームページ等
http://reposit.lib.kumamoto-u.ac.jp/

６．研究組織
(１)研究代表者
寺田 光徳（TERADA MITSUNORI）
熊本大学・文学部・教授
研究者番号：１０１５５４６８